

高速道路に入ってから、もう二時間近くが経っていた。

海に向かうはずだった車は、事故渋滞の最後尾に捕まったまま微動だにしない。前にも後ろにも、びっしりと車が詰まっている。右は中央分離帯、左はガードレール。外に出るどころか、窓を大きく開けることすらはばかれるような距離感だ。

知温は最初、本当に普通だった。

音楽の話をしながら運転して、天気の話をして、海に着いたら何を食べようかと笑いながらハンドルを握っていた。私も多少緊張しながらも、なんだかんだ楽しかった。

同級生と二人きりでドライブなんて慣れていないけれど、知温が相手だとなぜか気が抜けて、不思議と沈黙が苦にならなかった。

「うわ。この先、渋滞だってさ」

「え。そうなんだ……」

けれどこの時から、少しだけ雰囲気が変わった。

「……二時間は抜けられないな」

のんびりとした声だった。ため息でも悪態でもなく、ただ事実を確認するような口ぶり。

「二時間……。長いね……」

私が窓の外を覗こうとしたとき、助手席のシートが静かに倒れた。

「え、ちょっと」

「暇じゃん。全然進まないし」

それだけ。それだけ言って、知温はシートを倒したまま天井を見上げた。表情は変わっていない。むしろ少し、口の端が上がっている。

（暇、って……なんで今シート倒すの。暇ってそういうことじゃないよね。違うよね？）

ぼんやりとした不安が胸をよぎったけれど、知温はなにもしてこなかった。ラジオが渋滞情報を読み上げている。沈黙が続く。私は膝の上で手を重ねて、前の車のナンバープレートを眺めていた。

その時、ずっと、手が伸びてきた。

知温の指先がスカートの裾に触れて、ふわりと、布をめくり上げた。

「ちょ、ちょっ。知温、待ってよ！」

「いいじゃん、全然進まないんだし」

スカートは膝上まで折り返されて、太ももが露わになった。知温の手が、ゆっくりとその内側に滑り込んでくる。太ももの柔らかいところをやわやわと揉む。急いでいない。

「や、やめ……っ」

「あんま大きな声出すと、外に聞こえるから」

低い声で、静かに言われた。窓の外、すぐそこに

他の車がある。ドライバーがいる。その一言だけで、私の声はひっこんだ。

（聞こえちゃう。聞こえたら最悪だ……！）

知温の手が太ももの付け根まで上がってきた。

「……っ♡」

思わず息を詰める。知温の指先が、ショーツのふちをなぞる。触れるか触れないかのギリギリで、じりじりと迷わせる。

「やめて、知温くん……」

ちゃんと言えたと思ったのに、声が掠れていた。

「ほんとに止めてほしければ、ちゃんとはっきり言わないと♡」

追い打ちのように言われて、余計に声が出なくなる。軽い声で、全部がわかっているような顔で言われている。

ショーツの上から、割れ目に沿って指が押し当てられた。

「んっ……ッ♡」

小さく声が漏れた瞬間、知温が「ね」と言った。

「反応してんじゃん♡」

「ちがっ、これは……♡」

（ちがうのに……♡）

ぐ、とショーツの上から押し込みながら、ゆっくりと指をくにくくに♡と動かされる。薄い布越しなのに、熱くて明確な感触があって、頭がじわりと痺れた。

「や……う、ん……っ♡」